

海からの警告

豊かな循環へ

第4部 再生

① 海のゆりかご

光が差し込む海中には、海草のアマモが一面を覆い尽くし、視界を遮る。稲のように揺れる葉は長いもので1メートル以上あるだろうか。それをかき分けかき分け、進んでいく。

よく見ると葉の陰には、体長1、2センチのメバルの稚魚が所々に身を潜めている。目の前をミズクラゲがふわりと横切り、視線を落とすと海底にはインゲンチャクの姿も見えた。

5月上旬、笠岡諸島の白石島沖を潜った。深さ約5メートルの海底にびっしりと広がるアマモ場は、多様な生物のすみかとなっている。

アマモ場は潮流を緩やかにするとともに、葉が日光を遮断して水温の上昇を抑え、魚の「隠れ家」や産卵場となる。根元には栄養豊富な土壌ができ、魚の餌となるゴカイや小エビがすみつく。地球温暖化の原因である二酸化炭素を吸収する一方で、海洋生物に欠かせない酸素を供給し、豊かな生態系を育んでいる。

そんな働きからアマモ場は「海のゆりかご」とも言われる。

アマモの重要性を全国に先駆け、科学的に立証したのが岡山県水産試験場（現県水産研究所、瀬戸内市牛窓町鹿

岡山起点に重要性認識

RS230531

忍)だ。所長室のスチール棚には、県が大正時代の1922年度から4年間にわたって記録したアマモの調査報告書のコピー（原本の一部は県立図書館が所蔵）が保管されている。

A4判・約150ページ。瀬戸内市牛窓町地区、倉敷市味野湾、浅口市寄島町地区など県内計10カ所のアマモ場の水温や水の透明度のほか、そこに生息するクロダイやセイゴ、ウミタナゴといった魚の種類や大きさを月ごとに記し、比較しやすいよう一覧表にしてある。採取した魚の胃の中を調べるとアマモの葉や、藻場にすむエビ、カニなどが見つかり、アマモ場が生物多様性の維持に貢献していることを科学的に立証した。

地元漁協の協力を得て専任職員を配置。効率よく魚を捕獲できるように、当時珍しかったエンジン搭載の専用調査船（全長約9メートル、幅約2メートル）を建造するほどの力の入れよう。アマモの研究一筋で国内外の文献を調べてきた元職員、福田富男さん(76)は「おそらく世界でも最初の藻場調査で、内容も緻密」と評価する。

きっかけは、モガイを取るのにアマモが邪魔だとして刈り取りを求める漁師と、魚が取れなくなると言って反対する漁師が対立し、県が調査に乗り出したことだった。それが後に岡山でアマモの研究が盛んになる起点となった。

た。

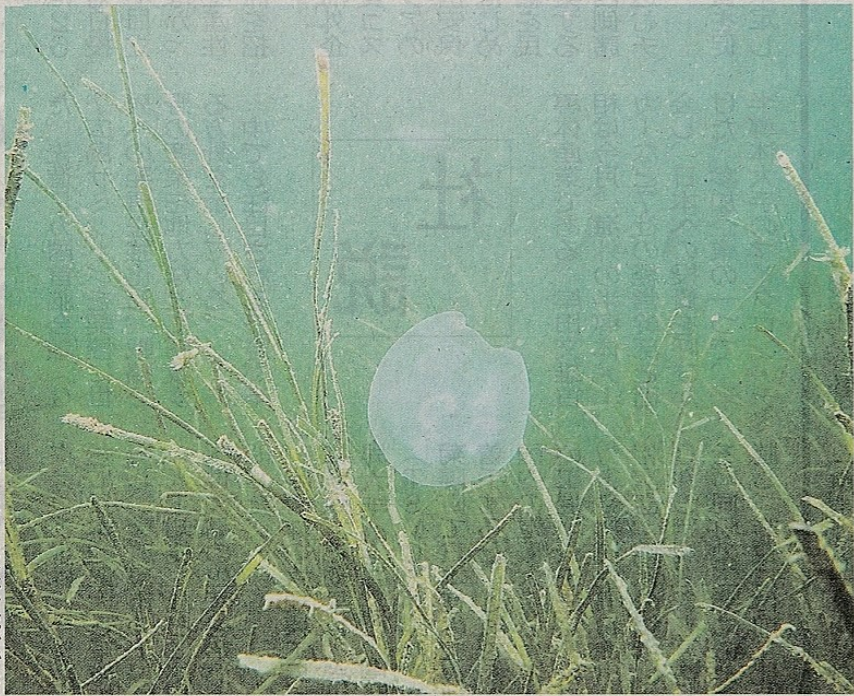
しかし、戦後の高度経済成長期以降、干拓や護岸整備、工業団地の開発などで全国各地のアマモ場はほとんど消失していった。県内では大正期の4300畝から1977年には675畝にまで激減。その後の保護活動で2020年には1878畝にまで持ち直したが、大正期の半分にも満たない水準となった。

「漁場ノ荒廢ヲ来タスノミナラス有用介類ニ至ル迄絶滅セシムルナキヲ保シ難キ場合アル」
調査報告書の巻末では、アマモ場が干拓などで失われるのを危惧し、こう警鐘を鳴らしていたが、約100年たったいま、皮肉にもその予言はほぼ的中する形となっている。

福田さんは「今一番大切なのは残ったアマモ場を守り抜くこと。さらに種をまいてできる限り増やし、広げることだ」と訴える。（久万真毅）

漁獲量の減少やノリの色落ちといった問題に直面している瀬戸内海。第4部「再生」では、人工魚礁の設置や栄養化対策などで豊かさを取り戻そうとしている官民の動きをリポートしながらその課題を検証する。

（次回から社会面に掲載します）



ミズクラゲが浮遊するアマモ場。目を凝らすと、葉の表面には光合成でできた酸素の気泡が付着している。5月8日、笠岡市・白石島近海（今中雄樹撮影）

ご意見、ご感想をお寄せください。〒700-8534、山陽新聞社「里海からの警告」取材班。ファクス086-803-8125、メールsatoumi@nyonews.jp

約100年前からアマモの消失に警鐘を鳴らし、岡山県水産試験場の調査で、岡山県水産研究所